エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第　２０８号

2019 年 8 月 1 日
編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三
電話　080-1232－0905
http://encounter.agape.gr.jp/

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より（８）

第 9 講　死に勝つ生涯(その 1)

内村鑑三

私の二人の先生の生涯について簡単に述べます。

一人は内村鑑三。内村鑑三の生涯は、50 いくつかの御時に一人娘を亡くされまして、そのなきがらをうずめる時に、ルツ子は娘の名前でありますが「ルツ子、バンザイ」と言って埋骨の墓の土をうずめられたそうであります。これを聞いて矢内原忠雄先輩が「キリスト教というものはすごい」と思ったそうであります。内村先生の信仰もその頃からいよいよ筋金が入って来たのではなかろうかと思うのであります。

先生が言われたのに「我々の信仰が簡単な一つの文で言い表せるようにならないと力がない」とおっしゃいました。「力がない」というのは、私は「死に打ち勝つ力」と解していいと思います。我々の

信仰が「私の信仰はこうだ」と簡単に一文で言えるようにならなければ、我々の信仰には死に打ち勝つ力がない。

主イエス・キリストを仰ぎ見よ

内村鑑三が昭和5年3月28日に亡くなりましたが、その数日前、弟子が先生を訪ねて、先生のご病状が重い、先生がお隠れになるかも分からん、だから「先生の信仰を一言で言い表してほしい、教えて頂きたい」と弟子が言ったら、先生は「主イエス・キリストを仰ぎ見よ」「仰ぎ見よ」と言われた。「贖いを信ぜよ」とも仰せにならないし、あるいは「天国の望み」とも仰せにならないし、あるいは「天国の望み」とも仰せにならない。「復活」とも仰せにならない。「聖書の勉強」とも仰せにならなかった。ただイエス・キリストを仰ぎ見よ」と言われた。

私は先生の生涯は、先生が死なれる時には、主を仰ぎ見て死なれたと思います。先生のすべては「主を仰ぎ見る」ということに尽きている。これは単純な行為でありまして、主を仰ぎ見るということは、誰でもできる。

ヨハネ伝3章14節、15節には、イエス・キリストのおっしゃった言葉に**「モーセ荒野においてへびを上げしごとく、我も上げらるべし。すべてわれを仰ぎ見る者は救われる」**と仰せになった。「仰ぎ見る」というのはヨハネ伝の言葉です。ロマ書には無い。そうであ

りますので、あのくらいロマ書を研究された内村鑑三先生が最期には「自分の信仰は主イエス・キリストを仰ぎ見る宗教だ」とおっしゃって、ロマ書に無い文句をもって先生の一生を貫かれた。これが一人の先生の生涯。

島村清吉先生の信仰、生涯

私の浄土門の信仰を教えていただいた先生で島村清吉という先生があります。…島村清吉先生の信仰、生涯、これは先生のお書きになったご自分の文章です。

「弥陀の本願を信じて、この世におる間に弥陀の光明のうちに摂取されますと、心がいつも極楽に通うておりますから、御恵みのひかりはるかにかぶりばや何につけても嬉しかりける。幸福なことがあるとこれほどのことでさえこれくらい嬉しいのに、極楽へ往生したらどれ程嬉しかろうと喜び、また不幸な目に遭えば、これは娑婆の有りさま、浮き世の習いである。世の中はこの苦しみの連続である。しかし、今に西方極楽へ往生させてもらったら福智無量の身としていただけると、幸、不幸共に何につけても嬉しかりけるであります。」こういう信心を持っておられました。

牧浦さんの話

先生の信仰を語るついでに、この先生の弟子の一人に牧浦という弟子がありました。私より 30 ぐらい年上でした。牧浦さんが 70 ぐらいの時私が訪ねた。訪ねたら、牧浦さんは 70 ぐらいの年で、目が見えない。そして病気に苦しんでおられた。何の病気であったか、私ちょっと記憶しません。

その時の牧浦さんの話に「小西さん、私の先生の島村先生は大学者であったが、平凡であった。私は今、年を取って、めくらになって、また最近は病魔に冒されて、まことに世間から見れば逆境でありますけれども、念仏の信仰からは非常に順境だ。毎日この先生の平凡な念仏を学んで感涙にむせんでいる」と言われた。

私はそれをこの耳で聞いた。聞いた時は私はまだ 40 になっていない。当時はその信仰がどれほどすごい信仰ということが分からなかった。今になって分かる。これは相当すごい信仰だということを。これが私たちの島村先生の生涯。

生老病死の苦

我々の祖先がよく読みました観音経というお経がありますが、観音経の文句の中に「生老病死の苦、漸をもって滅せしめたもう」とあります。生・老・病・死、これは仏教では「四苦」、4 つの苦しみと言っておりますが、「生」というのは、これは生まれる苦しみですか、生きていく苦しみか分りませんが、「老」は年寄りの苦しみ、「病」は病気の苦しみ、「死」は死ぬ苦しみ。この 4 つの苦を人類の 4 つの苦しみとしておりますが、それは「漸をもって滅せしめたもう」。観世音菩薩がだんだんだんだん自然に無くならして下さる。

そうお経には書いてありますが、生老病死と 4 つの苦しみがございますけれども、生・老・病というのは死の苦しみの一部分です。死の苦しみに打ち勝つことができたら、生きる苦しみ、「老」年寄りの苦しみ、病気の苦しみに勝つことができる。内村先生のように仰ぎ見ることが出来たら、また島村先生のように「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」ということ、念仏ができたら死に打ち勝つことができる。死に打ち勝つことができたら、本当の悲しみ、苦しみに打ち勝つことができる。すなわち念仏ができたら死に打ち勝つことができる。…「己に打ち勝つ力」、ここに人類の幸福がかかっている。

苦しみすべてのものに勝ちうる力の源

ロマ書第 8 章 18 節「わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。」

これは、私の最も好きな聖句の一つであります。

パウロは「今のこの時の苦しみは、やがて私たちに表わされようとする栄光に比べると」、すなわち、天国にイエスに迎えられて、そして時が来たらば復活の体をもらう、すなわち天国へ行って復活させてもらうというこの栄光の体、この栄光の生命に比べると、「現在の苦しみは問題にならない」と言った。ここに死に打ち勝つ力がある。死に打ち勝つ力があり、悲しみに打ち勝つ。死に打ち勝つ力はすなわち生きる力。生きる苦しみ、年取る苦しみ、病気の苦しみ、悲しみ、苦しみすべてのものに勝ちうる力の源はここにある。パウロはまさに復活の望み、「私たちは見ないことを望むなら、私たちは忍耐して、それを待ち望むのである」と 25 節に言っておりますが、「我は永遠の冠を目当てに走る」とパウロは言いましたゆえに、パウロはこの復活の望みを持って走った。ゆえに彼は死に打ち勝つの生涯を全うした。

私の生活について

第 3 番目には私の生活について簡単に申しあげます。私の生活はいつも申し上げている通り、内村鑑三先生の勧めによりまして私も一文を書きましたが、

> **生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国キリストに迎えらる、その時の喜びやいかん、されば、生きるも死ぬるも賜物なり。**

と、これが私の信仰告白であります。

何遍も言うとおり、「生きらば称名、このままで」ですから、生きたら「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と、このままで言ったらいい。私の「このまま」という字は、Just as I am。そうですから、悲しい時、苦しい時、そのままで「わが主イエスよ」と言う。僕でもできますよ。可能です。朝起きたら「主イエスよ」と床で称えて起き上がる。御名を称えて今日も歩まんと。そうですから「わが主イエスよ、わが主イエスよ」とこのままで言う。

「このままで」の意味

そして「目の前のなすべきをなし」。これも、「このまま」で目の前のなすべきをなす。そうですから「このままで」という字は「目の前のなすべきをなす」にかける。「このままで」という字は称名する方にもかかるし、目の前のことをなす方にもかかる。そうですから、腹立ったまま、嫌々と思いながら、心が乱れたままで目の前のことをしたらいい。このままですから、三の力だったら三の力でしたらいい。これも可能です。目の前のなすべき事をなすのですから。「このまま」というのはそういう意味です。

だから僕らみたいに、これ以上大きな声で 50 分も話をできなかったら、やめてもいい。しんどくなったらやめますよ。そういうわけで、私の義務はこのままでやったらいいんだから、易い。可能です。

そうですから、このままでやったらいい。このままで。腹が立っていたら腹が立ったままで、学問がなければ学問の無いままで、やったらいい。私も本当に無学、無得のままで聖書講義をやっている。

聖書の文句を信じたら間違わない

私の信仰は、

生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国キリストに迎えらる、その時の喜びやいかん。

死んだらキリストが迎えに来ると書いてある。それは、イエスが来ると書いてある。ヨハネ伝 14 章 3 節、私が行って、あなた方を迎えて、私の居る所にあなたがたをおらせるためである。イエス・キリストが嘘を言いますか。迎えに来てくれると思って少しも間違いがありませんよ。私は行く。そうですから、天国へ行って、その時の喜びやいかん。

浄土へ迎えられる時の喜び、これを恵心僧都が書いた、「その時の喜びや如何」。また恵心の先輩である善導大師が「浄土へ行った時のその喜び極まりなからん」と言った。善導や源信は嘘は言わない。彼等の言葉を信じて間違いない。「お経の言葉を信ずる者は、必ず衆生を正しく導く」と善導が言った。我等も聖書の文句を信じたら間違いない。